

小関 隆 教授 略歴・著作目録

略 歴

学 歴

1979 年 3 月	東京都立国立高等学校卒業
1979 年 4 月	一橋大学社会学部入学
1984 年 3 月	同大学卒業
1984 年 4 月	一橋大学大学院社会学研究科修士課程社会学専攻入学
1985 年 10 月	英国バーミンガム大学人文学部留学（1986 年 7 月まで）
1987 年 3 月	一橋大学大学院修士課程修了
1987 年 4 月	一橋大学大学院社会学研究科博士課程社会学専攻進学
1988 年 10 月	英国オクスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ留学（1989 年 9 月まで）
1991 年 3 月	一橋大学大学院博士課程に所定の年限在学し，所定の研究指導認定
1991 年 3 月	同大学院博士課程退学

学 位

1987 年 3 月	社会学修士（一橋大学）
1988 年 7 月	Master of Philosophy（History）（英国バーミンガム大学）
2007 年 6 月	社会学博士（一橋大学）

職 歴

1991 年 4 月	日本学術振興会特別研究員として一橋大学大学院社会学研究科社会学専攻において研究に従事（1991 年 9 月まで）
1991 年 10 月	東京農工大学工学部講師
1994 年 1 月	同大学工学部助教授
1995 年 4 月	同大学農学部助教授
2000 年 3 月	同上辞職
2000 年 4 月	津田塾大学学芸学部助教授
2003 年 3 月	同上辞職
2003 年 4 月	京都大学人文科学研究所助教授（2007 年 4 月より准教授）
2015 年 4 月	同教授（現在に至る）

主 要 業 績

単 著

- ・『一八四八年：チャーティズムとアイルランド・ナショナリズム』未来社，1993年。
- ・『プリムローズ・リーグの時代：世紀転換期イギリスの保守主義』岩波書店，2006年。
- ・『近代都市とアソシエーション』山川出版社，2008年。
- ・『徴兵制と良心的兵役拒否：イギリスの第一次世界大戦経験』人文書院，2010年。
- ・『アイルランド革命 1913～23：第一次世界大戦と二つの国家の誕生』岩波書店，2018年。
- ・『イギリス 1960年代：ビートルズからサッチャーへ』中公新書，2021年。
- ・『中立という選択肢：エーモン・デ・ヴァレラとアイルランドの第二次世界大戦』人文書院，2026年。

共 著

- ・『第二次世界大戦再考』人文書院，2026年。

編 著

- ・『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』（阿部安成・見市雅俊・光永雅明・森村敏己との共編著）柏書房，1999年。
- ・『世紀転換期イギリスの人びと：アソシエーションとシティズンシップ』人文書院，2000年。
- ・『記念日の創造』人文書院，2007年。
- ・『現代の起点 第一次世界大戦（全4巻）』（山室信一・岡田暁生・藤原辰史との共編著）岩波書店，2014年。
- ・『われわれはどんな「世界」を生きているのか：来るべき人文学のために』（山室信一・岡田暁生・藤原辰史との共編著）ナカニシヤ出版，2019年。

論 文

- ・「アイルランドにおけるチャーティスト運動」『西洋史学』148号，1988年3月，pp.31-44.
- ・「1848年のチャーティズムとアイルランド人移民：ロンドンを中心に」『歴史学研究』590号，1989年2月，pp.1-15.
- ・「アイルランドのナショナリズム：ダニエル・オコネルの選択」浜林正夫・神武庸四郎（編）『社会的異端者の系譜：イギリス史上の人びと』三省堂，1989年，pp.219-238.
- ・「1848年の『ザ・タイムズ』とイギリス国制擁護論」『国際研究論集』3巻1号，1990年4月，pp.70-102.
- ・「一八四八年，リヴァプールのアイルランド人と実力行使の脅威」『西洋史学』157号，1990年6月，pp.19-34.
- ・「ナショナリズムと土地問題：フィンタン・ローラーと青年アイルランド派」『一橋論叢』104巻2号，1990年8月，pp.148-166.
- ・「Patrick O'Higgins and Irish Chartism」, *Hosei University Ireland-Japan Papers*, no. 2, Oct. 1990, pp. 1-33.
- ・「チャーティストの「陰謀」とスパイ：ロンドン，一八四八年」『一橋論叢』107巻2号，1992年2月，pp.1-21.
- ・「1848年のアイルランドはいかに統治されたか？：クラレンドン総督とリベール運動」『東京農工大学一般教育部紀要』28巻，1992年3月，pp.37-66.

- ・ ‘Dublin Confederate Clubs and the Repeal Movement’, *Hosei University Ireland-Japan Papers*, no. 10, April 1992, pp. 1-49.
- ・ 「『自由に生まれついた』人びと：政治と民衆」井野瀬久美恵（編）『イギリス文化史入門』昭和堂，1994 年，pp. 98-116.
- ・ 「ヘンリ・ソリと労働者クラブ構想：「合理的レクリエーション」の試み」『東京農工大学一般教育部紀要』31 巻，1995 年 3 月，pp. 19-36.
- ・ 「労働者クラブにおけるイベントと人間関係：1890 年代のロンドンを中心に」『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』37 号，1996 年 10 月，pp. 1-42.
- ・ ‘The Portrait of a Clubman, Richard Gaston, 1840-1901’ 『人間と社会』9 号，1998 年 7 月，pp. 1-79.
- ・ ‘John Donnellan Balfe and 1848: A Note on a Confederate Informer’, *Saothar: Journal of the Irish Labour History Society*, no. 23, 1999, pp. 25-30.
- ・ 「アイルランド近現代史におけるナショナリズムと共和主義の「伝統」」（勝田俊輔・高神信一・森ありさとの共著）『歴史学研究』726 号，1999 年 8 月，pp. 22-33.
- ・ 「プリムローズの記憶：コメモレイトされるディズレイリ」『人文学報』89 号，2003 年 12 月，pp. 45-96.
- ・ 「19 世紀末のアイルランド問題とプリムローズ・リーグ：ホーム・ルール反対はいかにアピールされたか？」『人文学報』92 号，2005 年 3 月，pp. 41-118.
- ・ 「明るく，賢く，若々しく：「人気の指導者」にみる労働者クラブという集団」佐藤清隆・中島俊克・安川隆司（編）『西洋史の新地平：エスニシティ・自然・社会運動』刀水書房，2005 年，pp. 223-37.
- ・ 「ランドルフ・チャーチルの死」『ヴィクトリア朝文化研究』4 号，2006 年 11 月，pp. 3-22.
- ・ 「『哀れなカッフィ』とは何者か？：黒い肌のチャーティスト」竹沢泰子（編）『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店，2009 年，pp. 57-81.
- ・ 「総力戦という経験：第一次世界大戦と徴兵制」井野瀬久美恵（編）『イギリス文化史』昭和堂，2010 年，pp. 217-34.
- ・ 「産業革命の進展と社会問題」小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦（編）『大学で学ぶ西洋史〔近現代〕』ミネルヴァ書房，2011 年，pp. 121-6.
- ・ 「第一次世界大戦研究の現段階：京都大学人文科学研究所の共同研究を中心に」『西洋史学』245 号，2012 年 6 月，pp. 31-42.
- ・ 「歴史叙述と「想像力」：戯曲を素材に」大浦康介（編）『フィクション論への誘い：文学・歴史・遊び・人間』世界思想社，2013 年 1 月，pp. 211-232.
- ・ 「絶対平和主義と宥和政策：クリフォード・アレンの「建設的平和主義」」志村真幸（編）『異端者たちのイギリス』共和国，2016 年 4 月，pp. 89-111.
- ・ 「『^{ファイネスト・アワー}至上の時』の神話：イギリスの第二次世界大戦経験」川成洋（編）『イギリスの歴史を知るための 50 章』明石書店，2016 年 12 月，pp. 281-6.
- ・ 「アイルランド革命から「大戦後」を考える」『九州歴史科学』47 号，2019 年 12 月，pp. 119-26.
- ・ ‘European Crisis in Historical Perspectives’ (with Serena Ferente), *ZINBUN*, no. 52, 2021, pp. 65-85.
- ・ ‘The 1960s and the Rise of Thatcherism’, *ZINBUN*, no. 54, 2024, pp. 29-39.
- ・ 「『許容する社会』，モラルの再興，マーガレット・サッチャー」長谷川貴彦（編）『サッチャリズム前夜の〈民衆的個人主義〉：福祉国家と新自由主義のはざままで』岩波書店，2025 年 3 月，pp. 181-208.

翻 訳

- ・ アンドルー・ギャンブル「一九四五年以降の労働党」都築忠七（編）『イギリス社会主義思想史』三

省堂, 1986 年, pp.247-271.

- ・ドロシー・トムプスン『階級・ジェンダー・ネイション：チャーティズムとアウトサイダー』（古賀秀男との共訳）ミネルヴァ書房, 2001 年。
- ・ジェイ・ウィンター「^{カクストロフ}破局を記念・追悼する：^{コメモレイト}100 年後の第一次世界大戦」『思想』1086 号, 2014 年 10 月, pp.69-88.

書 評

- ・「書評：安川悦子『アイルランド問題と社会主義：イギリスにおける「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究』」『史学雑誌』103 編 2 号, 1994 年 2 月, pp.114-123.
- ・「書評：古賀秀男『チャーティスト運動の構造』」『歴史学研究』667 号, 1995 年 1 月, pp.52-55.
- ・「書評：高橋純一『アイルランド土地政策史』」『経済学論集』64 巻 2 号, 1998 年 7 月, pp.93-97.
- ・「書評：森ありさ『アイルランド独立運動史：シン・フェイン, IRA, 農地紛争』」『西洋史学』199 号, 2000 年 12 月, pp.79-82.
- ・「書評：川北稔・指昭博（編）『周縁からのまなざし：もうひとつのイギリス近代』」『週刊読書人』2001 年 1 月 5 日号, p.6.
- ・「書評：高神信一『大英帝国のなかの「反乱」』」『歴史学研究』746 号, 2001 年 2 月, pp.52-55.
- ・「書評：村岡健次『近代イギリスの社会と文化』」『ヴィクトリア朝文化研究』1 号, 2003 年 11 月, pp.83-86.
- ・「書評：土方直史『ロバート・オウエン』」『社会経済史学』69 巻 6 号, 2004 年 3 月, pp.108-110.
- ・「書評：谷川稔（編）『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』」『西洋史学』215 号, 2004 年 12 月, pp.68-72.
- ・「書評：若尾祐司・羽賀祥二（編）『記録と記憶の比較文化史』」『歴史学研究』812 号, 2006 年 3 月, pp.57-64.
- ・「書評：河村貞枝・今井けい（編）『イギリス近現代女性史研究入門』」『社会経済史学』73 巻 1 号, 2007 年 5 月, pp.112-114.
- ・「書評：法政大学比較経済研究所・後藤浩子（編）『アイルランドの経験：植民・ナショナリズム・国際統合』」『歴史と経済』208 号, 2010 年 7 月。
- ・「書評：坂上孝（編）『1848：国家装置と民衆』」『人文学報』101 号, 2011 年 3 月, pp.113-7.
- ・「書評：G. ステッドマン・ジョーンズ『階級という言葉：イングランド労働者階級の政治社会史, 1832-1982 年』」『社会経済史学』77 巻 2 号, 2011 年 8 月, pp.152-4.
- ・「書評：津田博司『戦争の記憶とイギリス帝国』」『歴史学研究』910 号, 2013 年 10 月, pp.55-8.
- ・「書評：池田嘉郎（編）『第一次世界大戦と帝国の遺産』」『史学雑誌』124 編 6 号, 2015 年 6 月, pp.104-112.
- ・「書評：David Reynolds, *The Long Shadow: The Great War and the Twentieth Century*; Jerry White, *Zeppelin Nights: London in the First World War*」『ヴィクトリア朝文化研究』13 号, 2015 年 11 月, pp.195-9.
- ・「書評：マイケル・ハワード『第一次世界大戦』」『歴史評論』792 号, 2016 年 4 月, pp.98-102.
- ・「書評：小野塚知二（編）『第一次世界大戦開戦原因の再検討：国際分業と民衆心理』」『西洋史学』261 号, 2016 年 6 月, pp.82-5.
- ・「書評：荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち：〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』」『英文学研究』93 巻, 2016 年 12 月, pp.112-6.

- ・「書評：長谷川貴彦『現代歴史学への展望：言語論的転回を超えて』」『歴史と経済』236号，2017年7月，pp.71-3.
- ・「書評：勝田俊輔・高神信一（編）『アイルランド大飢饉：ジャガイモ，「ジェノサイド」・ジョンブル』」『西洋史学』264号，2017年12月，pp.115-7.
- ・「ヒマラヤの硝煙：ウェイド・デイヴィス『沈黙の山嶺——第一次世界大戦とマロリーのエヴェレスト』」藤原辰史（編）『歴史書の愉悦』ナカニシヤ出版，2019年7月，pp.235-44.→一部改変のうえ，2024年4月刊の現代史アーカイヴス版『沈黙の山嶺（上・下）』（白水社）に「解説」として収録 pp.403-11.
- ・「書評：David Cannadine, *Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906*」『ヴィクトリア朝文化研究』17号，2019年11月，pp.178-82.
- ・「書評：ローベルト・ゲルヴァルト『敗北者たち：第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか1917-1923』」『西洋史学』270号，2020年12月，pp.125-8.
- ・「Book Review: David Cannadine, *Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906*」(with Shusaku Kanazawa), *East Asian Journal of British History*, vol. 8, April 2021, pp. 70-4.
- ・「クロスオーバー書評：新書における歴史叙述をめぐって 小関隆著『イギリス1960年代——ビートルズからサッチャーへ——』，金澤周作著『チャリティの帝国——もうひとつのイギリス近現代史——』を読む」（金澤周作との共著）『女性とジェンダーの歴史』9号，2022年2月，pp.46-57.
- ・「書評：山本通『チョコレートイギリス史：企業フィランソロピーの源流』」『神奈川大学評論』105号，2024年3月，pp.192-3.

解説，辞書の項目，コラム，エッセイ，その他

- ・「時代の概説：一九世紀以降のイギリス」浜林正夫・神武庸四郎（編）『社会的異端者の系譜：イギリス史上の人びと』三省堂，1989年，pp.211-218.
- ・「イギリスの総選挙」『歴史地理教育』569号，1997年11月，pp.56-61.
- ・「チャーチズム」「プレース」「ラヴェット」経済学史学会（編）『経済思想史辞典』丸善，2000年，pp.249-250, p.344, pp.423-424.
- ・「[「アソシエーションの文化」から考える]『21世紀フォーラム』76号，2001年1月，p.5.
- ・「ポピュラー・コンサヴァティズムを理解するために」『The Victorian Studies Society of Japan Newsletter』4号，May 2005, p.2.
- ・「アイルランド合同」猪口孝・田中明彦ほか（編）『国際政治事典』弘文堂，2005年，p.9.
- ・「コラム：歴史叙述・史料・記憶」佐藤清隆・中島俊克・安川隆司（編）『西洋史の新地平：エスニシティ・自然・社会運動』刀水書房，2005年，pp.84-6.
- ・「労働貴族」「労働者階級」川北稔（編）『歴史学事典13：所有と生産』弘文堂，2006年，pp.645-6, pp.646-7.
- ・「チルダーズ，リンチ，第一次大戦」『日本アイルランド協会会報』72号，2009年2月，p.1.
- ・「コラム：アイルランド問題」井野瀬久美恵（編）『イギリス文化史』昭和堂，2010年，pp.227-8.
- ・「コラム：アングロ・サクソンとケルト」小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦（編）『大学で学ぶ西洋史[近現代]』ミネルヴァ書房，2011年，pp.126-8.
- ・「リレーエッセイ 第一次世界大戦を考える（5）オペラ『銀の杯』の鮮烈な幕切れに漂う，戦争記念公園のそれと似た寒々しさ」『図書新聞』3144号，2014年2月1日.
- ・「第四世代の第一次世界大戦研究とその先」『思想』1086号，2014年10月，pp.89-93.

- ・「二つの世界大戦とイギリス」「チャーチル」イギリス文化事典編集委員会（編）『イギリス文化事典』丸善出版、2014年、pp.538-9, pp.540-1.
- ・「京大人文研共同研究班が読み解く世界史：第1次大戦から100年（3）徴兵制」『京都新聞』2014年12月20日、p.8.
- ・「徴兵制：人間の質より量を問題に」「二つのレクイエム」「『銀の杯』」「開戦百周年の夏に」藤原辰史（編）『第一次世界大戦を考える』共和国、2016年、pp.25-7, 74-8, pp.133-5, pp.245-6.
- ・「2015年の歴史学界：回顧と展望（ヨーロッパ現代一般）」『史学雑誌』125編5号、2016年5月、pp.366-9.
- ・「腫れものとしての第一次世界大戦、そしてハリー」世田谷パブリック・シアター『銀杯』（プログラム・ノート）、2018年11月、pp.32-3.
- ・「作品としての人文学」山室信一（編）『人文学宣言』ナカニシヤ出版、2019年3月、pp.144-7.
- ・「『永遠の絶望』の先へ」谷川稔・川島昭夫・南直人・金澤周作（編）『越境する歴史家たちへ：近代社会史研究会（1985-2018）からのオマージュ』ミネルヴァ書房、2019年6月、pp.159-63.
- ・「京大人文研90年の学知：第一次大戦、現代の起点に」『京都新聞』2019年12月19日。
- ・「京大人文研90年の学知：危機の時代 生きる指針に」『京都新聞』（座談）2020年4月16日。
- ・「人文学 beyond 2020の可能性」『KCSSES Newsletter』no.37（講演要旨）、2022年3月。
- ・「1920年代の「戦後の戦争」とは 「バラミリタリー」が毒した社会」（インタビュー）『朝日新聞デジタル』2022年9月14日。
- ・「コラム：未完のアイルランド革命」『岩波講座世界歴史 20 二つの大戦と帝国主義 I 20世紀前半』岩波書店、2022年、pp.187-8.
- ・「星組宝塚大劇場公演『恋する天動説』：1960年代イギリス 若者たちの文化革命」（インタビュー）『歌劇』1205号、2026年2月、pp.97-99.

科学研究費補助金

- ・奨励研究（A）1993年 「19世紀イギリスにおける共和主義の思想と運動」（研究代表者）
- ・基盤研究（C）2005、2006年 「19-20世紀転換期のイギリスにおける民衆保守主義の研究」（研究代表者）
- ・挑戦的萌芽研究 2008、2009年 「第一次世界大戦と現代世界の成立に関する超領域的研究：グローバル連関の視点から」（研究代表者）
- ・基盤研究（B）2009、2010、2011年 「一九～二〇世紀転換期における「戦争ロマン」の表象についての比較文化史的研究」（研究分担者）
- ・基盤研究（B）2012、2013、2014年 「『ヴィクトリア朝幻想』の形成と解体」（研究分担者）
- ・基盤研究（A）2012、2013、2014年 「第一次世界大戦と現代世界の変貌についての総合的研究：世界性・総体性・持続性を基軸的視角として」（研究分担者）
- ・基盤研究（B）2015、2016、2017年 「ポスト第一次世界大戦の時代としての現代史の再検討：世界性と現代性の概念を中心に」（研究分担者）
- ・基盤研究（A）2018、2019、2020年 「1970年代以後の人文学ならびに芸術の語りの形式についての領域横断的研究」（研究分担者）
- ・基盤研究（B）2018、2019、2020年 「サッチャリズムの歴史的前提：民衆的アーカイヴの構築に依る1970年代の再検討」（研究分担者）